心驚れる女（十一巻三三五米）

帝キネ現代映畫

原作者　佐藤春夫
脚色者　山内英三
監督者　豊田四郎
撮影者　小原譲治
主演者　香椎圀子

紹介　第三百八十二號

浴室らしい。女が背を向けて髪を梳つてゐる。溢れる湯水が洗場の上に流れる。カットバックで波頭が亂れてゐる。たしかに海である。汽船が走つてゐるのらしい。成程汽船だ。船体の一部が突如またカットバックだ。そして又、浴室で次が脚線美（美ではない）をちらりと見せてくれる。此の間の様々な技巧、モンタージュとして浴室の壁にかかつてゐる裸體畫などは一體何を見せやうと云ふのか、餘程敏感なものでないと解しかねるし、此の作品の全体から云つても大して必要ではないのである。要するに筋の上からでも倫係にある人物森山が歸朝の日、主人公たる金子が迎へると云ふに過ぎない。原作は讀むともつと簡明で效果的であつた樣である豊田監督はどの新らしい監督者も一度は經驗したであらう處の克明な所謂映畫的表現に對して努力してゐるが、それは却つて全体の機構を冗漫にしてゐるに過ぎない。而も彼は無駄な字幕でそれを重複させてゐる。眞心を持つ一人の監督者の眞心的製作品は往々にして一般觀客の興味には素直に迫り得ない結果に陷るものである、即ち豊田監督は此のスランプにある。彼の製作眞心に我々は一顧を與へ得るとしても、作品そのものゝ價値には水準以上の評價を與へ得ない。而も此の作品の取材が、愛慾の復讐を、ある思想團体のシンパサイザーとして決行しやうとする處にあるのであつて、原作通りな表現を敢てしやうとしたら、かなり當局の鋏を受けるであらうし、其の邊を或は關心した故のスランプであるかも知れない。併し、接吻の表現に二つの木の葉が相寄つて、その尖端から露の雫を見せた技巧など監督の苦心を察していゝ。香椎圀子はいつもの映畫よりも美しくカメラ慣れたメキアップを見せてゐる。併し此の作の性格を表現するには少し荷重の感がある。勝氣な悧伶な、執拗な女性には向け切れない一沫の淋しさが彼女の姿体の上に殘つてゐる。それが此の作品の性格を判然と現はし得ない障壁となつてゐる。牧の村口は相應はしい役柄だ。思想的な仕事の關士たり且つ女性に對する慾情に引かれ勝ちな、即ち近代の眞き青年の苦惱を彼は充分に現はしてゐる。藤間林太郎は單にそれ丈の役ぐある。グロテスクな此の思想團体の巢たる酒場があるが、ほんとうなら此の酒場などにもつと細やかな描寫が欲しかつたと思ふ。

――友田純一郎――

興行價値――朝日新聞の連載、佐藤春夫の原作そして新興帝キネと云ふ此の三者の持つ反響が最も相應はしく此の作品を生かせるだらう。

（十二月五日　淺草常盤座）